

舞鶴市域の神社石造物調査

京都府立大学考古学研究室

1. 神社石造物調査の目的

たいていの地域には、人びとが産土神として信仰し、共同で維持管理してきた神社がある。そうした神社の建物や石造物は、しばしば地域内外の人びとの出資によって造営・修理がなされ、そこに寄進者名や建立年月が記されることも少なくない。そうした記録は、神社を核とした地域のつながりをときほぐす歴史的な手がかりとなる。また、各地に博物館や資料館が設置される以前には、地域内で発見された文化財が神社にもちこまれて保管されることも多く、戦前・戦中において、神社は地域の博物館のような機能をもっていた。地域の歴史と文化をひもとくうえで、神社の調査はきわめて大きな意義をもっている。しかし、地方において過疎化が進み、また地域の間人間関係が希薄となりつつある現在、神社や祭礼の維持管理が困難となっている地域も少なからずあり、そうした地域の記憶を伝え、文化遺産を記録・保全していくことが急務となっている。

京都府立大学考古学研究室では、京都府下の各地で、寺社や街道脇に所在する石造物の調査を継続的におこなってきた。舞鶴市域においても、2013年と2014年に古文書・古地図調査、集落調査、街道調査といった地域調査の一環として、関連する神社の石造物調査を実施した。舞鶴市域の神社については『舞鶴市史』各説篇（舞鶴市史編さん委員会編 1975）などに整理されているものの、その石造物は文化財指定をうけた一部のものが言及されている程度で、大半は未報告であった。

今回調査したのは、堂奥の山口神社と長浜の高倉神社の石造物である。いずれも『延喜式』に記載のない式外社であるが、山口神社は『丹後国風土記』佚文に草創にかかわる説話が記されるなど、ふるい伝承をもつ神社である。一方、高倉神社の成立年代は明確でないものの、天文6年（1537）の棟札が伝わり、また慶長18年（1613）の陶製狛犬一対が市の文化財に指定されているほか、社殿内のガラスケースには神社に関係する文書や文化財が陳列されている。

山口神社の調査は、2013年11月24日に堂奥集落での聞き取り調査とあわせて実施した。調査は、菱田哲郎・向井佑介の指導のもと、丸本啓貴・田島靖大・平野友梨・松尾春那が石造物の実測にあたった。また、高倉神社の調査は、2014年9月27日に和田地区の聞き取り調査とあわせて実施した。向井の指導のもと、田島・板垣優河・中村彰伸・速水佑佳が実測を担当し、銘文調査には地理学研究室の院生・学生と小室智子氏（舞鶴市教育委員会）の協力をえた。

なお、報告に掲載した石造物の実測図は特に記載のない限り縮尺40分の1に統一している。また地図および配置図は北方位を上としている。

（向井 佑介）

2. 山口神社

(1) 神社の概要

山口神社は舞鶴市堂奥に所在する。堂奥集落の東側にあり境内の北側には山が、東、南、西には田園がひろがる。天道日女神アメノミチヒメノカミと大山祇神オオヤマツミノカミの二柱を祭神とし、社名の「山口神社」は祖母谷の山の口に座することから名づけられた（舞鶴市史編さん委員会編 1975）。具体的な創建年代は明確でないものの、『丹後国風土記』残欠には「山口坐御衣知祖母祠」の名称がみえ、その由来として祭神の一柱である天道日女神が年老いた後にこの地をおとずれて麻をつむぎ蚕を養うことを教えたという伝承を記している。したがって、風土記の編纂が命じられた8世紀初めから中頃には、この地に祠が存在し、祭祀がおこなわれていたことがうかがえる。

室町時代の康正3年（1457）に社殿修理がおこなわれた際の棟札の写しが残されているが、その後、山口神社を崇敬する在地豪族の矢野備後守によって天文15年（1546）と同18年（1549）にも社殿の修理がおこなわれている。しかし天文23年（1554）の兵火に遭って焼失し、再建されたのは江戸時代の元禄元年（1688）であった。また、『丹後国加佐郡旧語集』には元文2年（1737）に宮津で発見された鰐口に「加佐郡倉橋郷祖母谷村 山口大明神 文安二年（1445）十一月廿一日 勸進聖道仙敬白」の銘があったと記されるものの、この鰐口は現存しない。

(2) 境内の石造物

境内に現存する石造物は、石燈籠5基、狛犬4基、鳥居、手水鉢、社号標、板碑各1基がある。

石燈籠1は高さが3mを超える大型の石燈籠である。銘文からこの石燈籠が明治37年（1904）10月に堂奥地区の竹中大平により寄進されたことがわかる。なお、拝殿前につりさげられた2つの銅鈴（本坪）のうち1つに「奉納 竹中大平 明治卅六年（1903）五月吉日」の刻銘があり、この人物が前年には鈴を寄進していたことが知られる。

石燈籠2と3は一对をなしている。銘文に「明和五子二月吉日」とあり、明和5年（1768）に建立されたことがわかる。山口神社に現存する最もふるい紀年をもつ石造物である。石燈籠4は自然石を用いた大型の石燈籠である。詳細は明らかでないものの、聞き取りによるとこの石は修羅にのせて山の上から運んできたとのことである。なお、残りの石燈籠1基は年代が新しいため、今回は調査をしていない。

狛犬1・2と3・4はそれぞれ一对をなしている。そのうち、狛犬1・2は本殿と拝殿の間に位置し、台座の銘文によって安政6年（1859）に氏子によって寄進された狛犬であることがわかる。また狛犬3・4は、拝殿前の広場と参道の上に位置し、銘文により大正12年（1923）1月に東宮、つまり後の昭和天皇の結婚を祝って「多門院婦人會」により奉納されたものであることがわかる。

板碑は、自然石石燈籠の南側に、南向きにたてかけられていた。舟形を呈し、身部を隅丸方形に彫

りくばめて「南無阿弥陀佛」の6字を刻む。具体的な製作年代は不明である。

社号標は参道入り口の西側にたてられている。銘文には「大正九年九月」とあり、1920年に設置されたことがわかる。

また、玉垣は本殿と拝殿の間に本殿を囲むようにして設けられている。この玉垣の2本の親柱にはそれぞれ「御大典記念」「堂奥婦人會」と銘文が刻まれている。御大典は天皇の即位の礼を指すが、年号がないため大正天皇と昭和天皇のどちらの御大典を指しているかは不明である。

拝殿の南側にはベンチのような形状をした石製の台がある。銘文により大正3年(1914)に多門院の浅尾某によって寄進されたものであることがわかる。

境内にはその他、手水鉢、石地藏とそれを祀った祠が存在する。

(3) 石造物寄進の背景

山口神社の石造物には明和5年(1768)の石燈籠や安政6年(1859)の狛犬などがあるものの、多くは大正年間に寄進されており、この頃に現在の山口神社の整備がなされたことがうかがえる。そうした石造物は、堂奥の人びとが寄進したものばかりではなく、「多門院婦人會」や「多門院」の銘文が示すように多門院の人びとが寄進したものも少なくない。

前節において、拝殿前の銅鈴(本坪)のうち一方が堂奥の竹中大平によって寄進されたことを述べたが、もう一方の銅鈴には「多門院 石川種三」の刻銘があって多門院の人物によって寄進されたことがわかり、石造物以外の資料からも神社が堂奥と多門院の人たちによって維持されてきた状況が裏づけられる。

山口神社は神社が立地する堂奥地区の氏神であると同時に、隣接する多門院地区の氏神でもある。そのため、10月初めにおこなわれる山口神社の祭礼は、それぞれの地区の氏子が隔年でおこなっているという。こうした事情については、2013年11月24日の石造物調査に先立って堂奥公会堂においておこなった聞き取り調査のなかでも確認できた。ただ、祭礼については、後日、文化情報学のチームがさらに詳細な調査をおこなっているので、詳細はその報告にゆだねることとし、ここでは山口神社が堂奥・多門院両地区の氏神であるということのみ確認しておきたい。

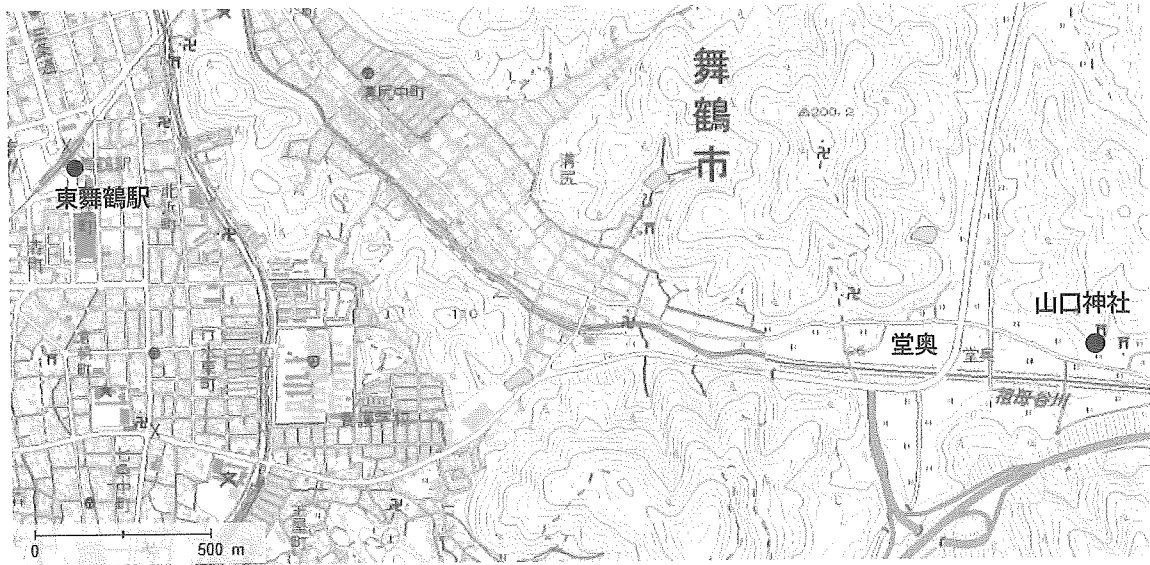
最後に、2013年11月24日の聞き取り調査および2015年3月1日の堂奥公会堂での報告会に出席いただき、堂奥地区や山口神社について多くの情報をご教授くださった皆様に深くお礼を申し上げます。
(田島 靖大)

参考文献

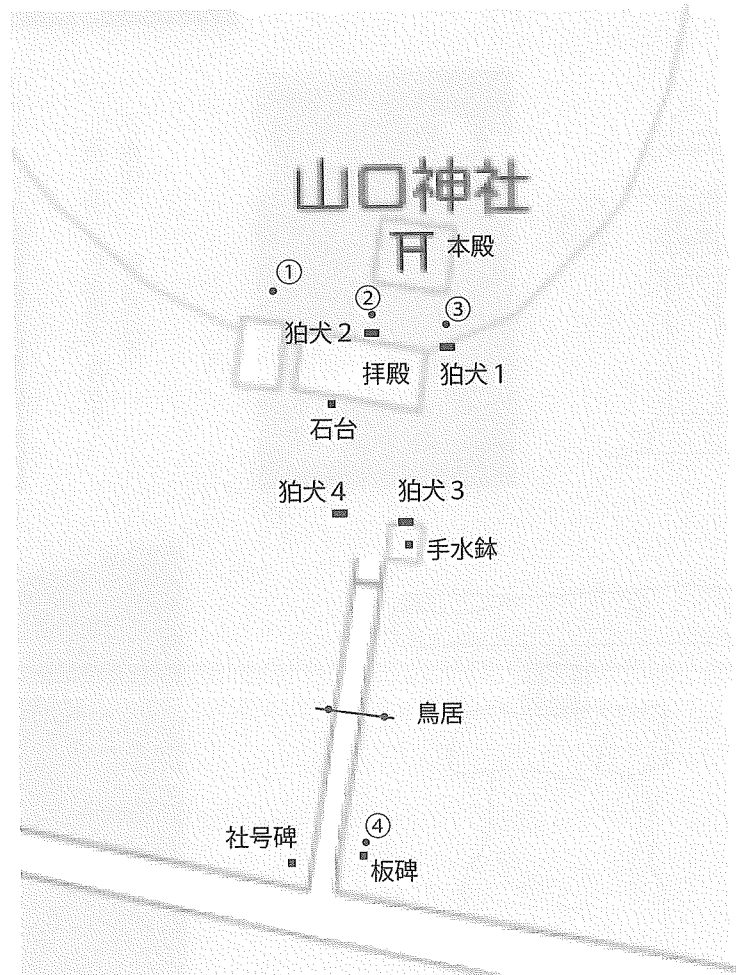
京都府教育会加佐郡部会編 1915『加佐郡誌』

坂本蜜之助 1933『倉梯村史』

舞鶴市史編さん委員会編 1975『舞鶴市史』各説篇、舞鶴市役所

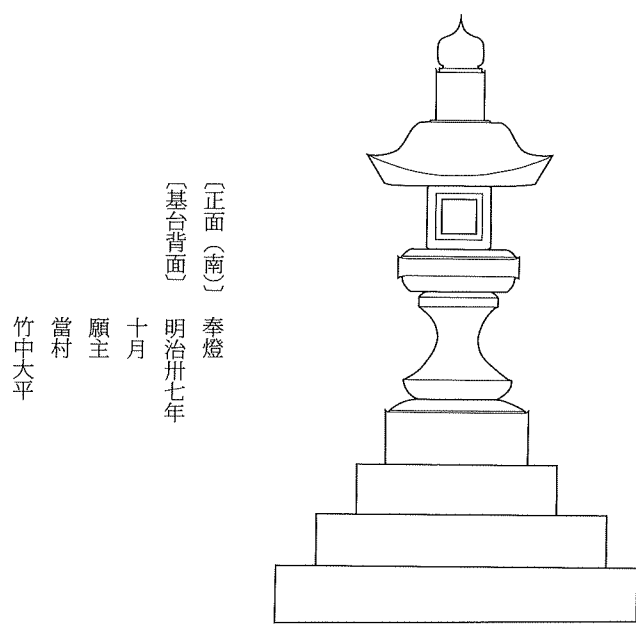


堂奥山口神社の位置 (1/25000)

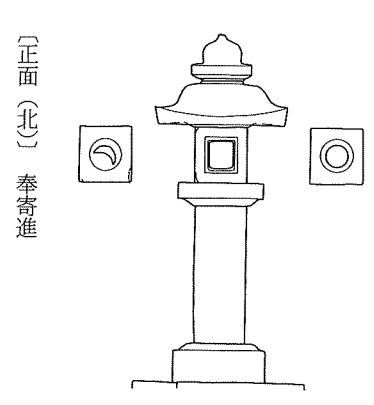


山口神社配置図

図1 山口神社 (1)

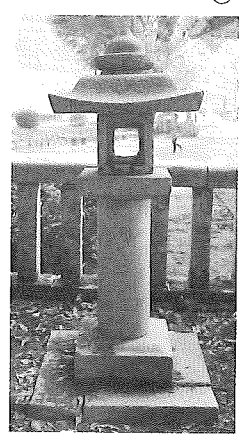


①



②

〔正面(北)〕 明和五子二月吉日
 〔右側面〕 願主石川氏



(②と同形)

③

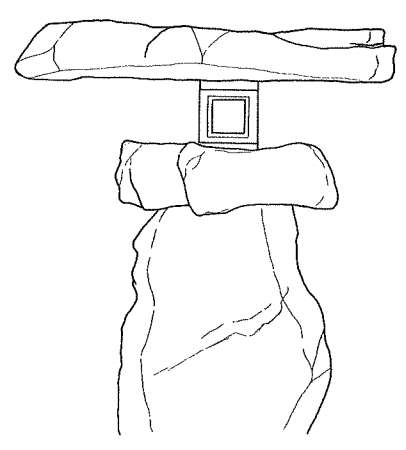
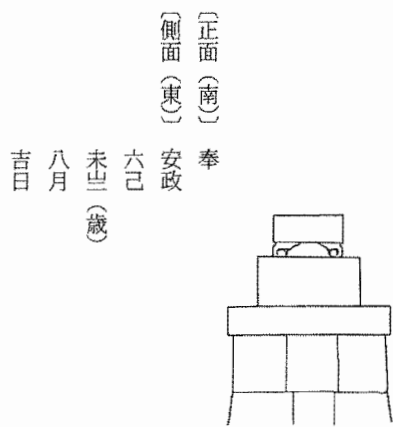


图2 山口神社 (2)

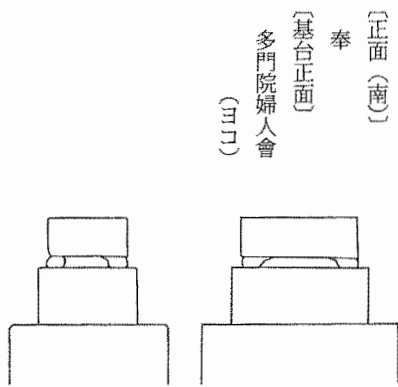


狛犬1

〔正面(南)〕 納
 〔側面(西)〕 願主(ヨコ)
 氏子中(ヨコ)



狛犬2



狛犬3

〔正面(南)〕 獻
 〔基台正面〕 東宮殿下(ヨコ)
 御成婚記念(ヨコ)
 大正十二年
 一月



狛犬4



板碑

〔正面(南)〕 村社 山口神社
 〔背面〕 大正九年九月建



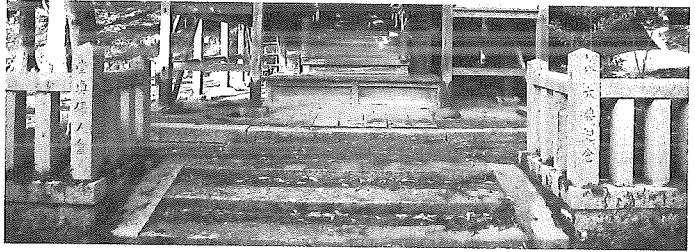
社号標

図3 山口神社(3)



石台

〔正面(南)〕
大正九年三月
〔側面(東)〕
多門院
浅尾



玉垣親柱

東親柱
〔正面(南)〕
御大典紀念
西親柱
〔正面(南)〕
堂奥婦人會



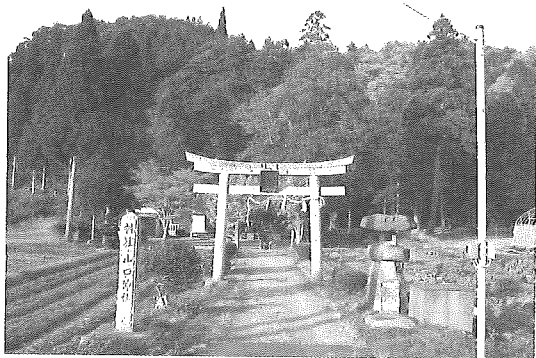
手水鉢



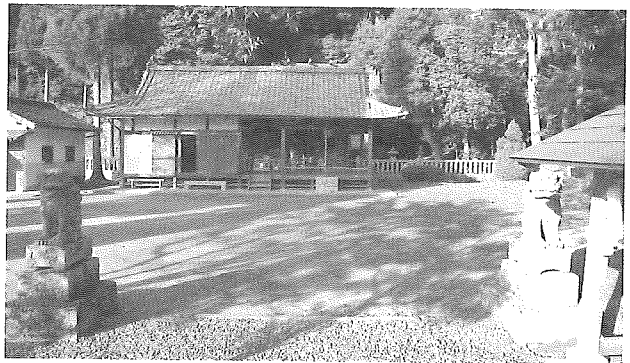
鳥居



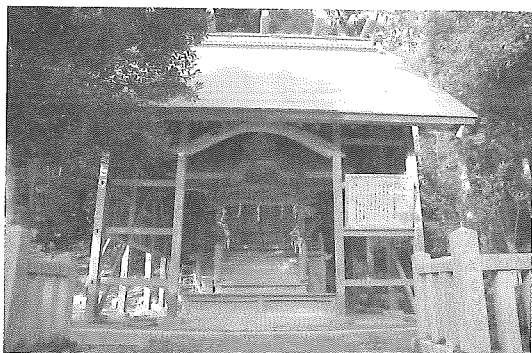
石地藏



神社全景



神社境内



本殿



拜殿

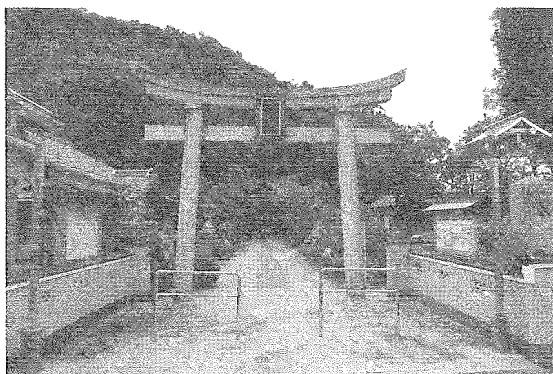
図4 山口神社(4)

3. 高倉神社

高倉神社は舞鶴市長浜宮谷に位置しており、祭神として春日大神（天児屋根尊）、誉田別尊（応神天皇）、天満天神（菅原道真）を祀っている。創建時期は不明であるが、天文6年（1537）の棟札が伝存しており、現在拝殿において保管されている慶長18年（1613）銘の陶製狛犬は舞鶴市の指定文化財になっている。当初の社格は村社であったが、昭和19年（1944）に郷社に昇格した。『舞鶴市内神社一覧表』によると現在境内社は五ッ森神社（保食神、大山祇神、日本武尊を祭神とする）、稲荷神社、十二月栗神社（五穀豊穡の神を祭神とする）、神石、天満天神社の5つである。なお大正4年（1915）の『加佐郡誌』で高倉神社の境内社として記されているのは五ッ森神社のみである。このうち十二月栗神社はもともと舞鶴市長浜の沿岸に位置していたが、同地域が昭和3年（1928）に海軍爆薬部の用地となったため高倉神社の境内に移転してきた経緯をもつ。また神石は自然石（主祭神鞍掛石）を祠の中に安置して祀っているものであり、社伝によると軍の施設拡張により海岸部から一部を取り壊すかたちで高倉神社境内に遷したということである。

神社は東を向いており入口に建つ鳥居から参道をはさんで一直線に拝殿、幣殿、本殿がならぶかたちとなっている。境内にある石造物として7基の石燈籠のほか、記念碑が2基、狛犬1対、鳥居、社号標、拜石がそれぞれ1基ずつ存在する。そのうち石燈籠3・4、7・8は対になっている。石燈籠3・4には大正8年（1919）の紀年銘があり、台座の四面に寄進者の名前が刻まれている。石燈籠5・6はそれぞれ天保6年（1835）、文政10年（1827）の銘があり建立時期に若干の隔たりがあるものの、形式と配置から一対であることを意識して造られた可能性がある。石燈籠7・8は寛政10年（1798）のものであり境内にある石造物では最も古い。

記念碑14は有栖川宮熾仁親王が高倉神社を参拝した記念として明治21年（1888）に造られたもので、かつては記念碑の上部や周りに砲弾が安置されていたことが、神社が所蔵する往時の写真から確認できる。また社号標2の背面には「日露出征記念明治三十九年（1906）十二月設立」の銘があり、軍との関わりが深かった舞鶴の特徴をあらわしている。（中村彰伸）

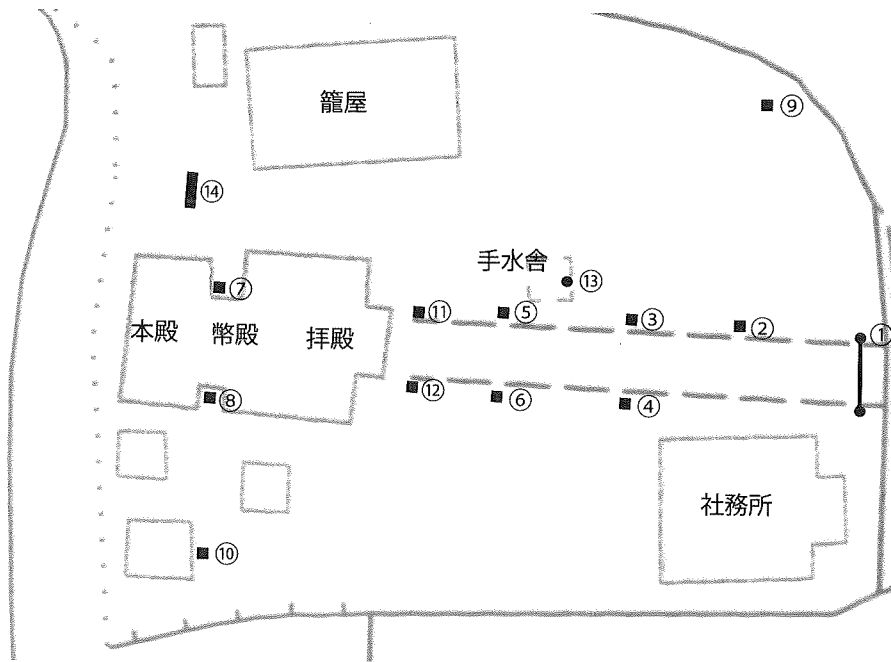


参道と鳥居

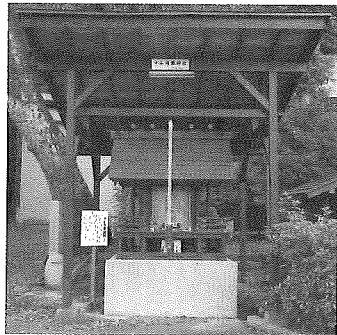


本殿

図5 高倉神社（1）



石造物の配置 (S=1/500)

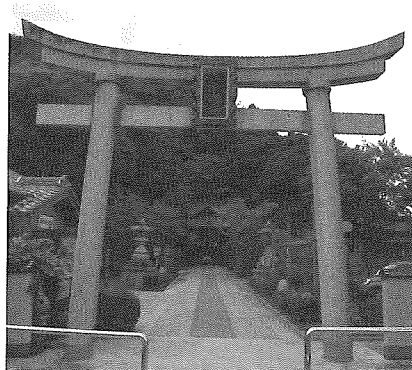


十二月栗神社



神石

〔正面額(東)〕
高倉神社



鳥居①

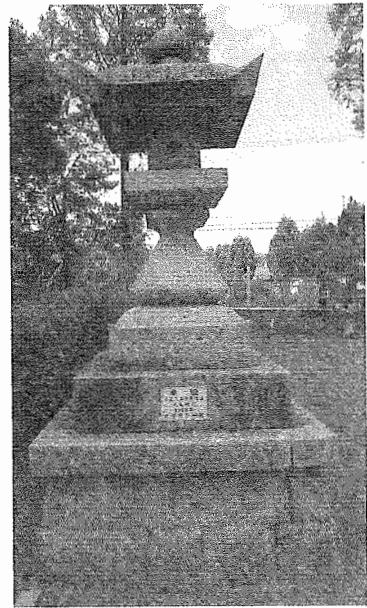
〔正面(東)〕
高倉神社

日露戦争出征記念明治二十九年十二月設立



社号標②

図6 高倉神社(2)



③

〔正面(東)〕
奉

〔背面〕
六月建立

〔基壇上段北側〕

〔基壇上段西側〕

〔基壇上段南側〕

深川勘治
山下壽太郎
青山留吉
福田市松
内海長次郎
安井□吉
安井角治
山田雷蔵
上野安治
松原庄太郎
有志者
造船

渡辺最三郎
大石治助
高垣幾之助
金織善市
岡嘉蔵
萩野徳右工門
澤田亀吉
宇治川鶴蔵
佐藤康作
土井久之助
竹内卯吉

横谷権兵衛
西村亀蔵
藤原卯之助
有田幸吉
綾井芳太郎
千原由蔵
秦清蔵
竹永與吉
發起人

〔基壇下段北側〕

〔基壇下段西側〕

〔基壇下段南側〕

江上強蔵
村□□郎
市田□三郎
野田善八
田中有造
田中下郎
川西□□郎
竹野□□郎
中山□三郎
東野□兵衛
高瀬龜助
岡本□次郎
藤田常三郎
塩田藤□
梶原□□
車谷廣太郎
畠山□□
野瀬長蔵
大浦和兵衛

柳田太郎
磯野直作
谷田慶太郎
吉田藤治
向井長三郎
八田大八郎
吉田直七
花井□三郎
齋藤忠太郎
品田音吉
稻見順二
瀬野喜作
高崎宗三
水元鹿蔵
村上謹三
車谷治八郎
加藤喜七
釜床留吉
名田屋嘉郎
浦野□郎
宇野勇

横川與三松
松川熊蔵
加藤文吉
吉川亥之松
山田光次
木船竹蔵
石黒正治
田辺甚次郎
柴田弥太郎
倉橋久吉
川西與三松
松本庄治郎
梅澤三吉
一八次郎
田島宗三郎

(注1) 強は旧字。
(注2) □は不明の篇に鳥。

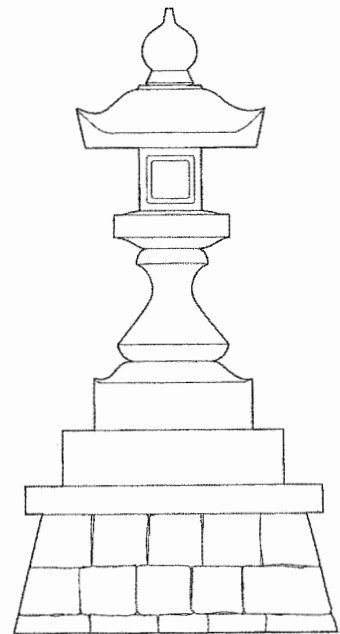
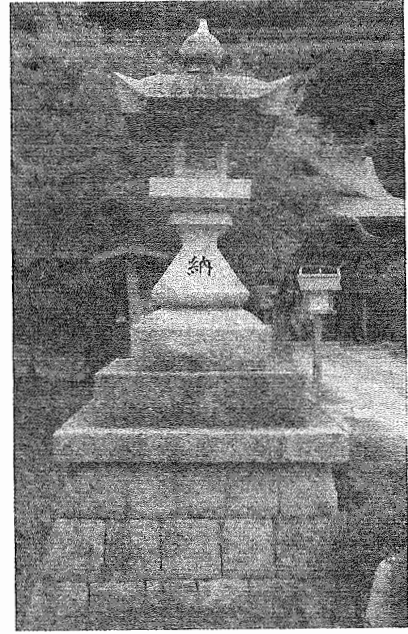


図7 高倉神社(3)



〔正面(東)〕
納

〔背面〕
大正六年

〔基壇上段北側〕
發起人
竹村作藏
藤原太郎吉
櫻本善藏
石本榮松
村本金藏
鈴木勘藏
橋田泰吉
村井邦人

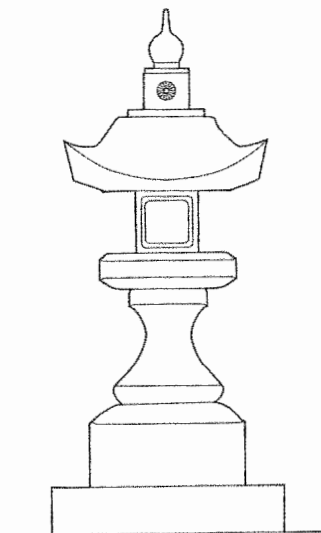
〔基壇上段西側〕
小室徳藏
小宮久造
瓜生信太郎
石塚牧重
作田鶴吉
馬場長藏
稻見栄太郎
□泉国之
竹田仁三郎
河部猪十郎
古川兼吉
原琦友市
富室良一

〔基壇上段南側〕
乙造船
有志者
三橋吉藏
澤倉吉
河原平吉
羽瀨吉藏
吉井米三郎
中谷彦市
佐野福藏
中村崑平
石橋菊松

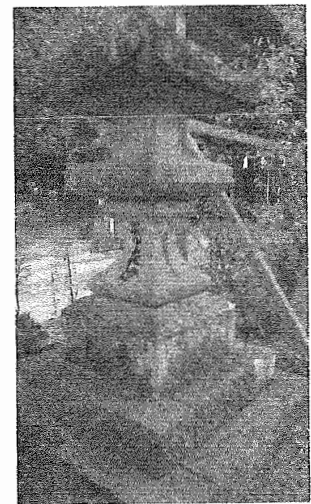
④(③と同形)

〔基壇下段西側〕
岩崎美□
江上瀧治朗
犬養徳之助
本田信行
玉木元次
公宅保治治
高橋直吉
平野利右工門
佐野□末
松川勝之助
小泉仁三郎
牧利作
酒井音吉
常見宇三郎
松井よつ
河地外一
上本甚藏
佐野茂十郎
澤田要治
田原九治朗
瀬野浅吉

〔基壇下段南側〕
伊藤文吉
吉橋庄吉
石井幸三
滝崎仙太郎
山口権太郎
田村傳□
高橋松之助
清田栄藏
箱崎弥吉
中津市太郎
朝倉右衛門
中西仁藏
南鶴吉
三村清助
中村嘉右工門
秦寅吉
山根庄三郎
下岡仙藏
松本民助



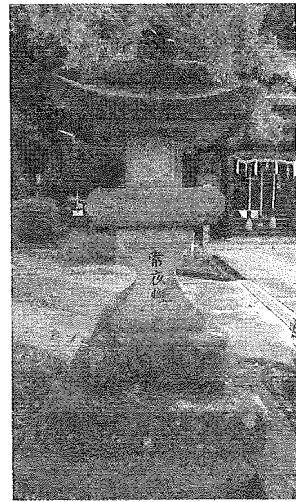
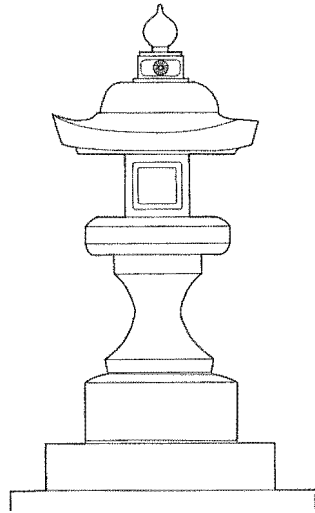
〔正面(東)〕 常夜燈
〔基壇正面〕 長若
〔右側面〕 三月吉日
〔左側面〕 天保六乙未歲



⑤

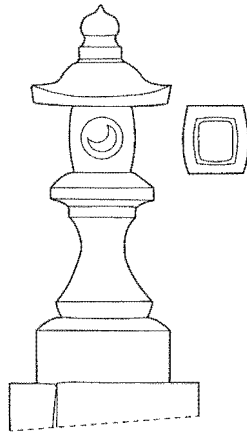
図8 高倉神社(4)

〔正面（東）〕 常夜燈
 〔右側面〕 文政十歳
 〔左側面〕 三月吉日
 〔基壇上段正面〕 平野屋町
 〔基壇下段正面〕 安久鍛冶講中



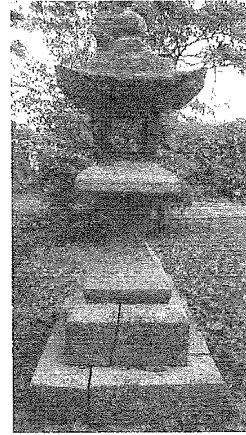
⑥

〔背面（西）〕 寛政十戌午歳

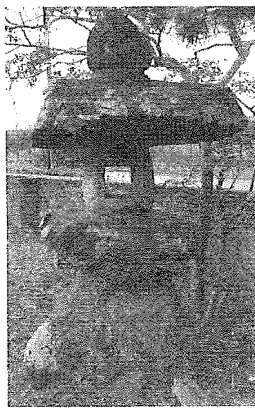


⑦

〔背面（西）〕 氏子若者連中

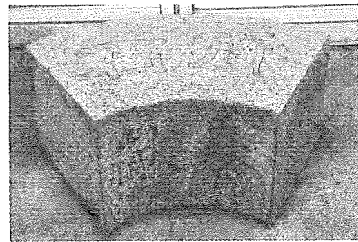


⑧(⑦と同形)



⑨

〔上面〕 拜石
 〔正面（東）〕 奉献
 〔右側面〕 明治卅七年八月
 余内村□□□
 山下磯吉



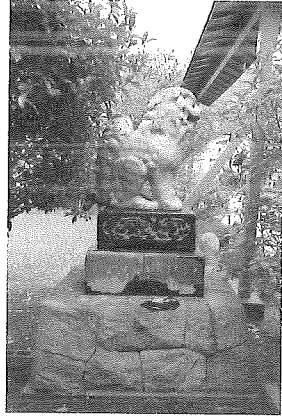
⑩

図9 高倉神社 (5)



〔正面（北）〕 献
〔背面〕 川北寅一

狛犬②(狛犬①と同形)



〔正面（南）〕 奉
〔背面〕 明治卅五年
八月吉日建之

狛犬①



石碑③

〔正面（南）から背面にかけて〕

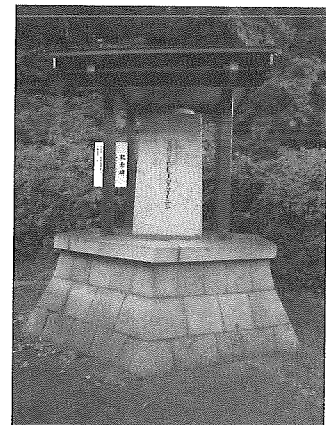
〔上段から続き〕

洗誠

堀 岩吉

飯野寅吉	堀 岩吉	松川九十郎	堀江助左エ門	布川宗次	世話係
深井惣兵衛	嶋内友吉	中 崑 民	目ざめ餅	新宮磯吉	瀬野永蔵
瀬野永蔵	藤森松蔵	鈴木烏賊蔵	本町一丁目中	遠藤武吉	瀬野歌蔵
瀬野準次	武部幾蔵	江上肥従	前田史郎	田中清蔵	倉藤元次郎
倉藤元次郎	増田駒吉	藪田鶴蔵	瀬野泰蔵	篠 仁吉	
瀬野枡蔵	布川松太郎	川西富蔵	布川丈吉	田井孫兵工	
梅垣直吉	瀬野義男	田下甚吉	芦田貞次郎	小和田六蔵	
瀬野歌蔵	布川仲蔵	中村長次郎	布川丹次	平松 某	
近田繁三郎	井本重吉	西村徳蔵	岸本孫次郎	甚目徳三郎	
金床栄九郎	江上重吉	上村俊蔵	字 和田一部落中		
梅垣藤吉	瀬野相蔵	竹内音松			
瀬野政蔵	浦井清一	上野徳松			
瀬野磯蔵	三輪市平	福井鉄次			
上野栄蔵	瀬野峯蔵	大余部町			
	瀬野力蔵	有志者中			

明治三十九年旧八月吉祥



石碑④

〔正面（東）〕
有栖川宮熾仁親王御参拝記念

〔背面〕

明治二十一年八月五日

図 10 高倉神社（6）

表紙の解説

	1	2	3
5		4	
(裏)		(表)	

- 1 舞鶴市堂奥地区現地調査成果報告会 (2015.3.1)
- 2 雲門寺 (舞鶴市余部上)
- 3 舞鶴幼稚園 130 周年記念展示 (2014.11.1)
- 4 五老岳から望む冬の舞鶴湾 (2015) 松岡秀雄氏撮影
- 5 山口神社 (舞鶴市堂奥、2015) 新谷一幸氏撮影

京都府立大学文化遺産叢書 (2008 ～)

- 1 南山城・宇治地域を中心とする歴史遺産・文化的景観の研究
- 2 近世伊予越智島地域における流動する人・物・情報
—御用日記・諸願控の総合的研究—
- 3 八幡地域の古文書と石清水八幡宮の絵図—地域文化遺産の情報化—
- 4 八幡地域の古文書・石造物・景観—地域文化遺産の情報化—
- 5 丹後・宮津の街道と信仰
- 6 城陽市域の地域文化遺産—神社・街道の文化遺産と景観—
- 7 熊野の信仰と景観—宗教遺産学の試み—
- 8 石見銀山城の歴史と景観—世界遺産と地域遺産—
- 9 和束地域の歴史と文化遺産
- 10 石清水門前寺院・南山城地域の古文書—京都府歴史資料の調査—



京都府立大学文化遺産叢書 第11集 舞鶴地域の文化遺産と活用

編集 東昇
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5
発行日 2016年3月30日
印刷 株式会社 北斗プリント社
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町38-2